

源氏物語

— その住まいの世界 —

池 浩三

源氏物語

—その住まいの世界—

池
浩
三

江苏工业学院图书馆
藏书章

中央公論美術出版

源氏物語

©

——その住まいの世界——

平成元年九月五日印刷
平成元年九月十五日発行

定価 八、二四〇円

著 者 池 浩 三

発行者 安 田 建 一

活版印刷 三 陽 社

用 紙 三菱製紙株式会社

製 本 青 木 製 本 所

中央公論美術出版

東京都中央区京橋二丁目八の七
電話 〇三(五六一)五九九三番

製 函 加藤製函印刷株式会社

ISBN 4-8055-0182-0

目次

はしがき 三

序説 六

第一章 物語の背景

一 後宮と女房文学 二六

二 結婚と家族 三一

三 信仰と生活 三五

第二章 平安京の実態

一 京域の構成 四三

二 宮城と里内裏 四八

三 後院と公卿の邸宅 五四

第三章 清涼殿と後宮

一 京都御所 六三

二	天皇と后妃たち	七〇
三	清涼殿の年中行事	八一
第四章 明堂と燕寝		
一	明堂としての紫宸殿	九六
二	寝廟形式と大嘗宮正殿	一〇四
三	燕寝としての清涼殿	一二三
第五章 寝殿造の構成		
一	『年中行事絵巻』の東三条殿	一二二
二	藤原道長の土御門殿	一二五
三	光源氏の邸宅	一四三
第六章 寝殿と対の性格		
一	寝殿と対の用途	一五五
二	寝殿の様相	一六〇
三	対に住む女君たち	一七二
第七章 聖所としての塗籠		

一 塗籠の構造	120
---------	-----

二 塗籠の用途と性格	126
------------	-----

三 塗籠における儀式	129
------------	-----

第八章 寢殿造の隔て

一 殿舎の間仕切	131
----------	-----

二 隔ての調度	133
---------	-----

第九章 寢殿造の室礼

一 褻の室礼	133
--------	-----

二 晴の室礼	134
--------	-----

三 白と鈍色の室礼	138
-----------	-----

第十章 感覚美の諸相

一 灯火の光	135
--------	-----

二 薫香の趣	136
--------	-----

三 音の風景	136
--------	-----

第十一章 四季の表徴

一 四季の部立	二七四
二 六条院の構想	二六〇

第十二章 四季の庭

一 春の庭	二九一
二 夏の庭	二九六
三 秋の庭	三〇〇
四 冬の庭	三〇四

第十三章 住まいの無常

一 玉の台	三二〇
二 夕顔の宿	三二六
三 小野の庵	三三〇

付図 「源氏物語絵解き」	三二七
--------------------	-----

図版所蔵・出典・撮影目録	三四六
--------------------	-----

源氏物語――その住まいの世界――

はしがき

『源氏物語』。この十一世紀のはじめに著された長編小説には、日本人の心の故郷ともいうべき世界があるといわれている。それは、日本人の根源的な心情や人生観、また敬仰し模範とすべき雅びの生活がそこに描き尽くされているからであらう。

さて、この『源氏物語』の研究は平安時代以来長い伝統をもち、その歴大な蓄積の上に、さらに今日でもつねに新しい課題が提起されて、その内容は多彩をきわめている。そこでいま、建築学の為すべきことは、寝殿造と称する平安貴族住宅における、当時の公卿の日記からはうかがい知ることのできない、住生活の実態をこの物語から読み取ることであらう。そのことは、ひいては、日本の伝統的住宅様式と日本人の住まいの思想の源流を確認することでもあると考える。

本書はそういう要請に応えようとするものであるが、ただその場合、『源氏物語』を一資料的文獻として、その叙述の中に、寝殿造の建築的形式ないし風俗、あるいは当時一般の住居観を抽出するのみではなく、でき得れば、その建築的事象に関する記述を物語の構想や展開と深くかかわりあうものとして捉え、作者の批評精神を通して、そこに映し出される『源氏物語』の住まいの世界を探究してみたいと思う。かく意図しながらも、そのような文芸的意義の考察は、一建築学徒の能く成し得るところではなく、多くの先学の成果に依って管見の及ぶと

ころの概要を述べたに過ぎない。読者諸賢のご批正を仰ぐものであるが、せめて、この小論が『源氏物語』の「読み」を深めるわずかな手がかりともなれば、望外の幸せである。

本書の出版にあたっては、稲垣榮三・日向一雅両氏に、拙稿について校閲の労を煩わし、それぞれご専門の建築史学・国文学の立場から適切な助言と補正をいただいた。ここに記して深謝の意を表するしだいである。

なお、十一世紀前半の制作と推定される『源氏物語絵巻』（徳川黎明会・五島美術館蔵）は、寝殿造の殿舎の構造・建具・調度の有様を知るためにも貴重な資料である。本書に付載する「源氏物語絵解き」では、その十九画面のうち、屋内あるいは前庭に臨む殿舎の一部を描いた十八画面を掲げて、物語の梗概と場面各部の事物についての解説を示した。その考証は、玉上琢弥訳注『源氏物語』第十卷（角川文庫）所収の「源氏物語絵引き」に負うところが大きい。学恩を忘れない。また多くの図版資料を既刊書などから転載させていただいたが、これらは巻末の「図版所蔵・出典・撮影目録」にその著者・書名・出版社・所蔵者を明記した。関係各位のご好意に心から感謝したい。

末尾ながら、本書の出版をお引き受け下さった中央公論美術出版編集長安田建一氏と、いろいろお世話になった同社編集次長小菅勉氏に厚く御礼を申し上げる。

凡例

一、『源氏物語』『枕草子』『紫式部日記』の引用文は日本古典文学全集（小学館）の本文（以下「全集本」）、『采花物語』のそれは日本古典文学大系（岩波書店）の本文（以下「大系本」）に依った。ただし、『枕草子』については、全集本にはない段を大系本によって補い、その旨明示した。

二、本書中『源氏物語』の意訳文は、玉上琢弥『源氏物語評釈』（角川書店）と全集本（校注・訳 阿部秋生・秋山虔・今井源衛）の訳文を基本とし、池田亀鑑編『源氏物語事典』（東京堂）を参照した。

また、『枕草子』は、全集本（校注・訳 松尾聰・永井和子）と日本古典文庫（田中澄江訳、河出書房新社）、『紫式部日記』は、全集本（校注・訳 中野幸一）の訳文を参照した。

三、有職故実、時代風俗についても、その記述の典拠を示すよう努めたが、註記なき部分は、概ね池田亀鑑『平安時代の文学と生活』（至文堂）および同著編『源氏物語事典』（東京堂）、岡一男『源氏物語事典』等に依拠した。

四、物語・日記・有職故実書の成立年代および内容は、寝殿造住宅の考証にかかわる重要な事柄である。各章の「註」には、周知のものも含めて、これら文献資料の解説を、『群書類従解題』『角川・日本史辞典』から抄録した。

五、本文中の図版は（図〇〇）のごとく、各章と章中順番の数字をもって示し、「源氏物語絵解き」は（付図一〇）と表記した。

序 説

『源氏物語』の主人公光源氏の時代は、歴史上の醍醐・朱雀天皇の在位時代（八五九～八八二）に設定されているが、それは、寝殿造と称する平安朝貴族住宅の様式が完成したとされる時期にあたる。

さて、この物語には実にさまざまな住宅が物語の舞台として描かれている。それらは、内裏の清涼殿にはじまって、藤壺・桐壺・梅壺といった後宮、朱雀院や冷泉院などの後院、さらに何よりも、光源氏の邸宅である二条院とその東院、四町を占める広大な六条院、それから末摘花の姫君が住む、荒れ果てた故常陸宮邸、前播磨守明石の入道の数奇を凝らした館、落魄の親王八の宮の寂寥たる宇治の山荘、喧騒な五条界限の夕顔の宿、そして、この物語の終幕の舞台となる比叡山麓の鄙びた小野の庵などであるが、これらの住宅内部の様子や鋪設された調度の有様、庭の風情がそこに生動する登場人物とともに精細に描写されている。ここでは、いわゆる寝殿造の典型としての二条院を中心に、本論で取りあげる事柄について概説しておきたい。

一、二条院の結構

二条院は、源氏の亡母桐壺の更衣の里邸を、源氏が元服して葵の上と結婚後、父桐壺帝の命によって立派に改築されたという。そこは、源氏が、三十五歳の秋に落成した六条院に移るまで、葵の上没後正妻格にあった紫の上とともに住んだ邸宅であった。

鎌倉時代に著された『源氏物語』の注釈書『河海抄』によれば、二条院は陽成院に準拠するとしているが、こ

の説に従えば、二条院の邸地は大内裏の西、東を西洞院大路、北を大炊御門大路に接し、一町（四〇丈・約一二〇メートル平方、約一四、五〇〇平方メートル）を占める規模であろう。ここに示した二条院の想定平面図（序図②）と全景模型（序図④）は、作者紫式部と縁の深かった藤原道長の京極土御門殿（長和五年焼失前）の諸殿舎の構成を基礎として、物語の中の二条院に関する叙述や、『年中行事絵巻』に描かれた邸宅の様子などを参看しつつ試みに再現してみたものである。土御門殿の規模結構については、太田静六・角田文衛両氏の研究によって、ある程度具体的に知ることができる。

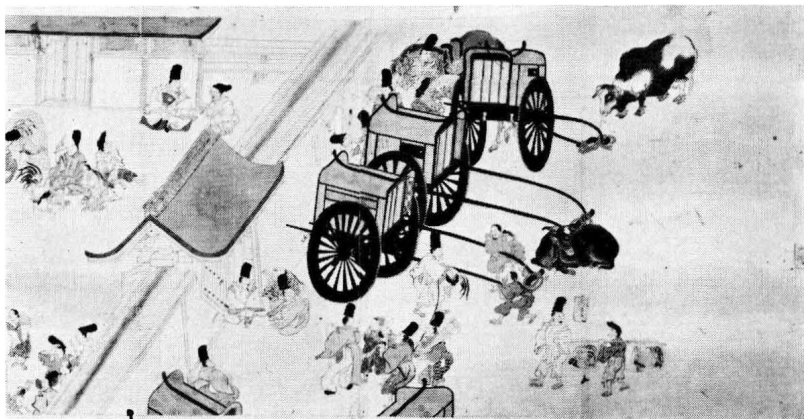
物語では、この二条院には寢殿と東・西の対があつて、源氏は東の対に住み、紫の上を西の対に置いたとある。寢殿は主人源氏の正式の居所ないし儀礼的な場所で、日常生活の場は対であつたようである。その「対」の字義は「向かい合った一対」のことであるから、対とは、寢殿を中央にその左右対称に建ち並ぶ殿舎ということが原義であろう。一般に大路に面した方が表向きであるから、源氏はその方の対に住んだのである。なお、寢殿は、六条院が完成する以前、斎宮の女御（秋好中宮）が宮中より退出したときの御座所に当てられているから、二条院はいわば彼女の里邸でもあつた。

ところで、平安時代後期の右大臣藤原宗忠の日記『中右記』に、公卿某々の邸宅について、「如法一町家、左右対・中門等相備也。」「東西対・東西中門、如法一町之作也。」などと見え、この記事からも、寢殿造（その呼称は江戸時代末の沢田名垂著『家屋雑考』による）の住宅は、寢殿と東・西対という結構が伝統的法式であつたと推測できる。『源氏物語』の二条院はまさに「法の如き一町家」である。当時の上級貴族の邸宅の実例から推して、北の対の存在も考えられるが、京極土御門殿でも、北の対は寛弘六年（一〇〇六）夏ごろ増築されたもののようにあるから、それは「一町家」の必須条件ではなからう。

ともあれ、一町の敷地四周には築地（土塙）がめぐり、東・西、および北に門を開く。東・西の門は四脚門であらう。「蓬生」の巻に、故常陸官邸では、この築地も崩れ落ち、東西の門には葎が覆い茂っていたとあるが、『枕草子』（第二四段）は「人から馬鹿にされるもの」として「築地のくづれ」をあげている。⁽³⁾洛中にそういう荒廃した家々がまま見かけられたのであらう。

この築地に囲まれた邸内、東西ほぼ中央に東西棟の寢殿が南面して建ち、その左右に南北棟の対があつて、それらは渡殿・透渡殿とよぶ殿舎で連絡される。そして東西の対からは廊が南にのびて南庭を囲む。東西の廊には中門・待所・車宿を設け、東の廊の南端には池にのぞんで釣殿、西の廊の南端には念誦堂があつたと想像される。二条院に関する叙述には釣殿のことは見えないが、一町規模の邸宅では、それは当然あるべきものとした。また、念誦堂は、源氏が密かに熱愛した義母藤壺が亡くなつたとき、傷心の彼が籠り、泣き暮したという御堂である。二条院には、このほか数々の唐物などを納めた御倉があつたし、下屋とよぶ板葺きの雑舎も北の築地沿いに多く建っていたにちがいない。

『源氏物語』の時代は、万葉の時代における母系制社会特有の妻問婚を引き継いだ婚姻制、すなわち婿取婚が行われていた。妻問婚は求婚とか結婚が当人同士の意志による自然婚であるが、そこに親がしだいに介入するようになって、結婚が儀式化されるようになる。それが婿取婚というわけである。高群逸枝氏の研究によれば、道長の父兼家には六人の妻がいたが、彼は東三条殿を本拠として、その妻のもとへ通い、生涯特定の妻の家に住みつくことはなかったという。彼はたいへん古風な結婚生活を送つたのであるが、道長となると、彼にも三人ぐらい妻がいたが、源雅信の京極土御門殿に婿取られ、その娘倫子に一年ばかり通い、長女彰子が生まれるころから、ここに住み込んで終生同居となつた。

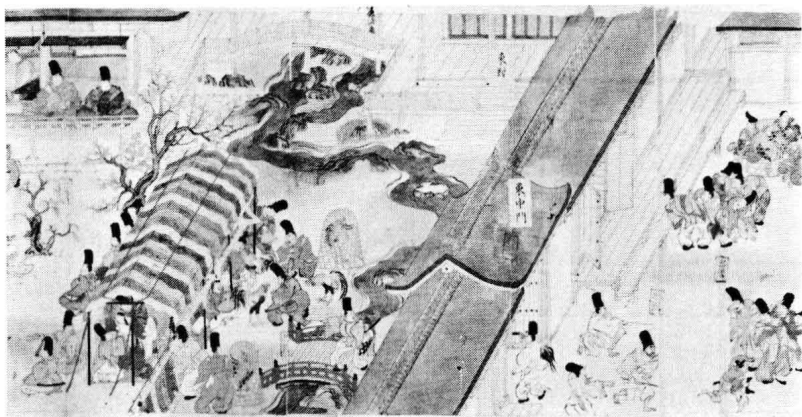


序図-1 寝殿造の結構。右から築地と東門，東中門と南廊，東対，東渡殿，三間四面の寝殿，西渡殿，西中門と並ぶ。『年中行事絵巻』巻3「闘鶏」 (1)

物語の光源氏も、本邸二条院から左大臣邸（三条殿）の墓の上のもとへ通い婚をしている。紫の上は母方の後見がないために二条院へ引き取られ、葵の上没後源氏と結婚することになるのであって、その境遇は『落窪物語』のヒロインの場合とよく似ている。それは当時一般の結婚の風習とは少し異なるようである。

東西の中門、そこを経て至る東西の対といった寝殿造の殿堂の構成には、そういう婚姻制が反映しているともいえよう。東西の対に娘たちがそれぞれ住んでいて、そこへ婿が通ってくるわけで、「住む」とはそのことを意味したのだという。

さて、二条院、寝殿造の住宅はみなそうであるが、その南庭には砂子（白砂）が敷きつめてあって、さまざまな儀式や舞樂の場として使われた。源氏十八歳の冬、ここに連れてこられた紫の上に同行した乳母の眼には、庭の白砂の輝きが玉を敷いたように映った、と物語は書いている。そして、遣水が、東の渡殿の下から、前裁（まへざり）の中を縫うように流れて、南の池に注ぐ。池には築山をなす中嶋（なかつしま）があつて、その島々の間には唐橋（からはし）などが架けられていた。「胡蝶」の巻には、六条院のそういう池に竜頭（りゅうとう）



(2)

鷄首^{けきす}の楽船を浮かべて、詩歌管絃の遊びを行ったさまが艶麗な文章で描かれている。

この寝殿造の庭園には古代中国の神仙思想の影響も認められるが、むしろそれは『古今和歌集』における四季的自然の具象化というべきものであろう。築地が囲む自己完結的空間に配される前栽や遣水、池と中嶋といった庭園の景物とは、『万葉集』に詠まれた野趣に富む自然そのものではなくて、平安朝貴族の和歌的美意識によって選択され、再構成されたきわめて人工的な自然なのである。⁽⁴⁾

それはともあれ、『年中行事絵巻』の「闘鷄」の画面の邸宅は、「一町家」より大分小規模のものであるが、この絵によって、寝殿と南庭、透渡殿と東対、南にのびる廊に設けられた中門、という寝殿造の基本的結構がよく理解できる(序図1)。

二条院は、六条院へ移転後は紫の上に伝領されたが、彼女は、晩年病あつく、所をかえんがために六条院からこの院に移り、いったん六条院へもどるが、法華經千部の供養を「わが御殿とおぼす二条の院」で行い、そのままこの院の西対で亡くなった。そういうわけで、紫の上は「二条の院の君」と呼ばれ、「二条